

# 序

2017年7月総務省は、日本の総人口が1億2,675万人になったとする人口推計を発表している。働き手の中心である15～64歳の生産年齢人口が32年ぶりに8,000万人を下回る一方、65歳以上の高齢者の割合が比較可能な統計がある1950年以降はじめて総人口の4分の1を超えた。

このように本邦は経験したことのない超高齢社会の最中にあり、薬物治療を考えるうえで、患者のライフステージや疾患背景を考慮した処方設計や処方提案を行うことが重要であり、薬学生や薬剤師はこうした包括的な臨床能力を伸ばしていくことが望まれる状況にある。

また、新薬の登場に加え個別化医療も急速に進んでおり、薬剤師をはじめとした医療従事者には、従来までの医薬品適正使用との違いを認識し、患者に応じた薬物治療を提供することが求められている。

そこで、現代社会の変化を鑑み、薬学生や薬剤師が他の医療従事者と十分に連携できるように臨床マインドを堅持し、患者特有の疾患に対する適切な薬物治療を施行できることを狙いとして編集したのが本テキストである。

本書は、新しい薬学教育モデル・コアカリキュラムに基づき、これからの臨床薬理学の講義テキストとして使用されることを想定した構成となっている。決して断片的にならず、各章との系統性をもたせることで、より理解が深まるように配慮した。「国試に役立つチェック問題」で各章の理解度を確認でき、「薬理を学ぼう」で主な薬剤について作用機序の振り返りができるようになっている。

さらに、大学での講義だけでなく、その先にある臨床の場でも活かせるよう、通常の薬剤投与での薬理作用の記載に留まらず、薬物感受性の変化に伴う薬物有害事象の発生を見逃さないためのフィジカルチェックについても記載している。生理機能低下時の治療法や副作用発現の可能性を見据えた処方チェックや薬効解析の基礎力が培える点で、これからの臨床を担う薬学生や薬剤師に有益な内容に仕上がったものと確信する。

最後に、本書作成にあたり、終始多大なご協力をいただいた羊土社の杉田真以子氏、永山雄大氏、久本容子氏ほかスタッフの皆様にご感謝申し上げます。

2017年8月

大井一弥